

令和3年度宮崎県総合計画審議会第1回専門部会

(人づくり部会)

会議録

日時 令和3年11月10日(水)

11:05~12:05

場所 宮崎県庁防災庁舎防51号室

○事務局：皆様方、審議会に引き続きお疲れ様でございます。定刻となりましたので、ただいまから宮崎県総合計画審議会、第1回人づくり部会を開催いたします。

初めに、部会長、副部会長をご紹介申し上げます。まず、新原委員でございます。

○新原部会長：新原でございます。よろしくお願いいたします。

○事務局：新原委員には、総合計画審議会会長の指名によりまして、この人づくり部会の部会長を務めていただきます。次に、中村専門委員でございます。

○中村副部会長：県立芸術劇場の中村でございます。よろしくお願いいたします。

○事務局：中村専門委員には、部会長の指名により、部会長に欠席等があった場合の職務代理を行う副部会長を務めていただきます。その他の委員の皆様におかれましては、時間の都合上、申し訳ありませんがお手元の部会名簿に代えさせていただきたいと思っております。また、委員の皆様に加えまして、松浦総合政策部長が同席させていただいております。

次に資料の確認をさせていただきます。本日お配りしている資料は、次第、配席図のほかに議題の資料「本日の論点「人づくり」と、参考資料としまして資料1～3及び現行の総合計画の冊子を配布しております。資料の無い方、足りない方はいらっしゃいませんか。よろしいでしょうか。

それでは早速ですが、本日の議題に入らせていただきたいと思います。ここからの議事につきましては、新原部会長にお願いしたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

○新原部会長：はい。部会長を仰せつかりました新原でございます。皆様のご協力をいただいて、本日の会議を滞りなく進められますようよろしくお願いいたします。

それではまず、本日の会議録署名人を指名させていただきたいと思っております。本日出席いただいております委員・専門委員の中から、河野委員と甲斐専門委員にお願いしたいと思いますが、よろしいでしょうか。

○一同：異議なし。

○新原部会長：ありがとうございます。それでは議事に入ります。議題「長期ビジョンの策定における主な論点」についてです。それでは事務局から説明をお願いします。

○事務局：総合政策課の山下と申します。よろしくお願いいたします。座って説明をさせていただきます。お手元の資料、人づくりの資料の3枚目をお開けください。「本日の論点「人づくり」と書いてある資料です。

本日は、人口減少の抑制、そして高等教育機関のあり方、この2つの論点になります。次のページ「人づくり関連指標」のところで説明させていただければと思います。まず「人口減少の抑制」についてであります。人口減少につきましてはこれまでも総合計画審議会の論点として議論いただいておりますが、今回は「女性に選ばれる宮崎」づくりという観点で論点をまとめました。

人づくり関連指標の1ページをご覧ください。上のグラフは本県の出生数及び合計特殊出生率の推移を表したものになります。なお、令和7年以降の女性人口については、国立社会保障・人口問題研究所の推計を使用しております。合計特殊出生率とは、15歳から49歳の女性の年齢別出生率を合計したもので、1人の女性がその年齢別出生率で一生の間に生むとしたときの子供の人数に相当します。本県の合計特殊出生率は、全国でも高い水準にありますが、女性の人口自体が減少するため出生数は年々減少の傾向にあり、この抑制が重要な課題となっています。

下の表をご覧ください。これは平成12年、平成22年、令和2年における本県の5歳ごとの年齢別・男女別の人口を表したものです。表の一番下の欄が、15歳から49歳の人口となります。赤く囲っていますが、本県ではこの層の女性人口が減少しています。

その表の下に、男女それぞれの減少率をまとめております。特に、平成22年～令和2年の10年間に於いて、男性の減少率12.2%に対し、女性は14.7%ということで、本県では出生数に影響するこの層の女性人口が減少しています。また、一番下の表にまとめてある15歳～19歳の人口ですが、10年後の25歳～29歳の層を見ると、男女とも人口が大幅に減少していることから、進学等で県外に流出した後に、県内に戻ってきていない若年層が多いものと推測されます。特に平成22年～令和2年の10年間で女性の減少率は、男性に比べて大きくなっております。

続きまして、2ページをお開けください。上のグラフは、本県の年齢階層別転入超過数になります。進学や就職を機に、15歳～24歳の若年層が、県外に流出していることがわかります。性別の特徴としては、男性は15歳～19歳、女性は20歳～24歳の層の転出が最も多いです。

真ん中及び下のグラフは、他都道府県からの転入者数・他都道府県への転出者数について、それぞれ2010年～2014年の平均、そして2015年～2019年の平均で分けて表しています。2014年までの5年間で2019年までの5年間で、転入はほとんど変わりませんが、男女ともに若年層の転出が増加しており、特に20歳～24歳までの女性の転出が、他の年齢に比べると目立ちます。

続きまして、3ページになります。上のグラフは、県内出身の県外就職者に対し、今後、宮崎へUターンする意向があるかという問いに対する回答をまとめたものです。グラフ内を赤で囲っていますが、本県へのUターンの意向が「ない」、もしくは「未定」と答えた女性の割合が男性より多く、特に18歳～29歳の層で男女差がかなり大きくなっております。

また、下のグラフは、どのような条件整備がなされれば宮崎に戻るかという問いですが、

下の表の黄色で塗ってある数値をご覧くださいと、一番左の項目の「県外企業と同程度の給与水準」という回答がどの年齢層でも多い中、18歳～29歳の女性は、右から3番目の項目「充実した公共交通機関の整備やプライベートを楽しめる住環境の整備」を求める傾向が強いという結果が出ています。県としましては、自然減対策として、出会いから結婚、出産、子育てまで切れ目のない支援に取り組んでおりますが、出生数に影響する15歳～49歳の女性人口が減少しており、女性の社会源対策にも目を向ける必要があります。

そこで1つ目の論点は「女性に選ばれる宮崎づくり」を進めるためにはどのような取り組みが必要か」としたところであります。

続いて2つ目の論点となります。2つ目の論点は、高等教育機関のあり方です。大学など地方の高等教育機関の果たす役割について、論点をまとめたところであります。資料は4ページになります。

上は、文科省によるSociety5.0において求められる人物像をまとめたものです。特に2つ目の「新たな社会を牽引する人材」では、デジタル化や技術の進展など社会の変化に対応できるよう技術力の向上や新たなスキルの修得、そして創造する力に言及しています。また、下の経団連の資料ですが、企業における人材育成の課題として、特に、課題2「会社主導による受け身のキャリア形成からの転換」、課題3「デジタル革新を担える能力の向上」、この2つが挙げられていて、その取組の3つの柱ですが、自立的なキャリア形成の支援、そしてデジタル革新を担える能力開発に取り組むべきとあります。現在、これらの求められるスキルを習得するため、リカレント教育やリスキリング等の学び直しが注目されております。

次の5ページをご覧くださいと思います。上にありますが、働き方の変化によって、今後新たに発生する業務で役立つ知識やスキルを学び直すリスキリング、これにつきまして、表のとおり、大手企業がITデジタル研修を実施しています。お金がある企業は自前で、そして都市部では様々な民間訓練機関に通うことができますが、本県のような地方では人材育成のノウハウや人的資源に限界があり、学び直しの方が少ないというのが現状であります。

ページ下になりますが、本県では、大学等と連携し、産業人財育成プログラムである「ひなたMBA」の中で、概要のとおり、経営に必要なスキルの習得等を支援しているところであります。細かい説明は省略します。

これからの地方の学びの可能性はどうかということで、6ページをお開けください。上のグラフは、大学進学者数等の将来推計になります。18歳人口の減少に伴い、大学進学率が上昇しても大学進学者数は減少し、特に地方の大学は入学定員充足率が大きく低下すると見込まれています。

また、下の資料では、平成30年に出された中央教育審議会答申ですが、高等教育機関の今後の役割について、社会人・留学生を含めた「多様な価値観が集まるキャンパス」の実現に触れており、教育資源の有効活用を行うことで、地方の学びを維持することが求められて

いるところであります。そこで 2 つ目の論点は、「本県で活躍する人材を育成するために、大学など地方の高等教育機関の果たす役割はどうあるべきか」としたところであります。説明は以上であります。

○新原部会長：それでは、ただいま説明がありました「長期ビジョンの策定における主な論点」、2 つあったかと思えますけれども、これについて皆様方のご意見をお伺いしたいと思います。どちらの論点からでも結構です。ご意見がありましたらお願いいたします。

○黒木委員：はい。まず人口問題ですが、女性のいわゆる子供を生める世代が減った理由、男性よりも女性の方が減るといふ理由をどういうふうに掴んでいるのかなど。そしたらそれにどう対処するかということをしなければいけない。このアンケートにあるように、給料が安いとかということだけではないということを行っている。

それからもう 1 つは、どこに女性が帰るのかということ。極端な話、宮崎市に帰るのか私の村に帰るのかで、全然違う理由がある。だからそういうところに対する取組をどうしているのか。アバウトにしてしまうと、決まっているけれどもどちらも作用しないという心配もあるので、そのあたりの分析はどうだったのかということを考えましたので、よろしく。

○新原部会長：はい。黒木委員からのご質問があったところですが、事務局、お願いできますか。それか担当の課。

女性が減少する理由をどんなふうに掴んでいるのか、そこに対応しなければいけないと。また、女性はどこに帰るのか、どこにいるのかということだったかと思いますが。

○総合政策部長：多分、事務的に行政の方に聞かれると、そこまでわかっていないというところ。私がいろいろなデータを見ていく中でのお話ですが、男性も女性もそうですけれども、若者がどんどん出て行きだすということで、随分昔は就職が大きかったのですが、この 20 年～30 年ぐらいの中では、大学進学というのが非常に大きな要因になっているところ。県外に随分出ています。それが帰ってきていないということですが、その中で、この 5 年ぐらいを見ると、地方創生で、県としても、県外に出ないで県内に定着してもらうとか県外へ進学しても帰って来てもらうということを結構やっています。男性の方は随分変わりつつあるのかなと思っているのですが、女性の方がその年齢層の人口に対する割合で言うと、帰ってきていない。ですから、おそらく就職なり、進学して就職してそのままどまっているというのがかなり大きいのだろうという感覚を持っています。そこはもう少し分析する必要があるだろうと思っているところです。

○黒木委員：（県外に）出さないというのはできない。出さないという選択肢はないです。今おっしゃったように、帰って来てもらう。その人が帰ってくるのか、全く別の人に来ても

らうのか、そのあたりの整理をして、どういう働きかけをするかを考えないといけない気がします。

○**新原部会長**：ありがとうございました。今、論点1のことでお話が出ていますが、関連でどなたかご意見ありませんか。

○**鮫島委員**：皆さんいろいろなお考えをお持ちだろうと思いますが、僕も黒木委員と同じような考えを抱いています。あまりにも、ラフな数値しか見えていないので、これで原因は何でしょうかと分析するにはデータが少なすぎて、既婚か未婚かというのもわからないし、それでは難しいなという気がいたします。もう少し詳細な、或いはここに若い人たちがおられて、その人たちと対話ができるというのであれば、まだできそうな気もしますけれども、この中でこの年齢層の女性が居てということではないので、ちょっと僕自身は隔靴搔痒の感じがしています。

それからもう1つ、「女性に選ばれる」という表現自体ですが、相手の男性がいないからかもしれないですし、何なのかというのがいろいろありますよね。今、ジェンダーのことをいろいろ言っているときに、「女性に」というようにターゲットを絞ってこのような表現を出されるというのも、もう少し考慮された方がいいのではないかと僕は思います。若手に選ばれる、「若手」だけでもないかもしれません。

それから、さらに言えば、これは本当に宮崎県だけの問題でしょうか。徳島県も神山はやっているけれども、他のところも結局コスモポリタンエリアに出て行く人は出て行って、そこで結婚していろいろする人がいる。それをUターン、Iターン、Jターンしていただくために何が必要なのかというのは、宮崎だけの問題でもないように僕は思いますし、さらに何か情報があるのであればそういうところを詰めたいたと。何をここで詰めたいたのかっていうのが少し僕にはクリアじゃないので、それをもう少しクリアにさせていただければと。

○**新原部会長**：ご意見があったところですが、事務局から何かもう少し、こんなことで意見を出していただければということありますか。

○**事務局**：ありがとうございます。確かにおっしゃる通り、女性も年代とか既婚・未婚でも違いますし、子供がいる・いないでも違いますし、介護とかそういう、その他の事情を抱えているというところでもいろいろ求めるところが違うと思いますので、おっしゃる通りなかなか大きなデータでは、わかりにくいところは確かにあるというところでは。

事務局側としましては、人口減対策をとって行く中で、子育ての支援とか、県としてもいろいろな面から施策を打っているところではありますけれども、目に見えて大きく変化をしていくにはまだまだというところがありますので、女性として暮らしやすかったりとか、ここに住んでみたいとか、先ほどお話のあった神山町のように選んできてくれるような環境という

ところを、どのようにしていけばいいのかということもありまして、少し女性に寄っているところはありますけれども、ご意見を聞かせていただければということです。よろしくお願いたします。

○新原部会長：女性というところで少しターゲットが絞られるというのがありますけれども、女性に限らず、これまでも議論されていますように、どうすれば宮崎が選ばれたり、宮崎に帰って来たりするかという論点でのご意見ですとか、論点 2 の大学等の高等教育機関での人づくりみたいなこともあわせて、ご意見いただければと思います。どなたかお願いたします。

○総合政策部長：あまり堅苦しく考えていただくというのは、意図が違うのかなと思っています。この論点のところで提示しているのは、事務局の方が、問題意識として持っているのはここですよということを言っているだけの話で、これはズレているのではないかということでも全然構いませんし、先ほど鮫島委員からありましたように、もう少し掘り下げた分析しないといけないということも、方法論としてのご意見としては、非常にありがたいと思っています。

20 年先をどういうふうを考えようかということなので、10 年だと、目標を作ったら結構業績に縛られるんですよ。意識しながらやらなくてはいけないのですが、20 年後を見た時にこれからこんなことを考えていくべきだということのお話で、それぞれのお立場でのお考えをいただければ、また事務局の方でそれをどう整理していくのかということになるので、自分はこう思っているとか、こんなところが大事なのではないかということをお話いただければそれでいいのかなと思います。

○新原部会長：ということですので、ご意見をお出してください。

○鮫島委員：3 ページの下のアンケートがありますね。少ない数のアンケートではありますが、これを見ると僕はものすごく面白いなと思ったんですけども、例えば教育なんかはそんなに、20%~30%をどうとるかというのはちょっと難しいところですけども、教育はまあまあ受け入れられているわけなんですね。教育ももう少し駄目かなと思ったんですけど。給与水準とかプライベートを楽しむことができる住環境とかありましたけれども、公共交通網を宮崎ですごく充実させるというのは、人口の問題とかを考えると、なかなか難しいだろうと思います。多分、自家用車を使えない人たちに対していかにそのようなことをうまくするのかというのは、25~29 歳の女性がなぜこういうことに答えたのかというのが、公共交通網で東京みたいにパッパッパッと乗ってできるというのがないということであれば、それを楽しんでいる人たちはここに答えたんだろうなと思います。

でももう一方の、「プライベートを楽しむことができる住環境」というと、宮崎は割と広

い住環境で、お庭もついていてというような、一歩外に出るとすごく良いように思うんですけども、それがこういう低い結果で、問題が多いと言っている。だから、本当に映しているのかどうか。数が少ないアンケートで何とも言えないだろうと思うんですけども、こういうところから1つやっていくというところがあり得るのかなと。

しかし、例えば給与水準と言っても、給与水準を単に上げるということは、その企業のポリシーとか様々なことがあって、企業だけで解決できる問題ではないと僕は思うので、ここから考えてみるということが1つの切り口ではないかと思います。でも、このアンケートの結果は本当ですかというふうに思っています。

○ウォーカー専門委員：よろしいですか。私は娘が2人いますけれども、2人とも県外にいます。ただ2人とも、県外に出て外で仕事をしていても帰って来ます。宮崎が大好きだと言っています。今お示したアンケートについては、ネガティブなところばかり見せているんですよね。逆に、宮崎のいいところを、どういうふうに宣伝して、いろいろな人に魅力を感じてもらおうかという、その観点も絶対必要だと思うんですよね。

昨年度の本学での出前講座までは、宮崎の「ゆたかさ」という指標ができていたということも、私は知らなかったわけですが、やはりたくさん宣伝できるものがあると思います。そういう観点をもって、これとどう関係しているかというのを考えていく必要があるのではないかと思います。

○鮫島委員：好きに話をしているのであれば、自分だけ手を挙げるわけではないんですけども、SDGsの観点からいうと、宮崎ってすごく良いのがたくさんあるわけですよね。ですからこういう、ウォーカー専門委員が言ったように、ネガティブな聞き方ではなくて、ポジティブなところをたくさん聞いていくと、また違う芽が出てくるのではないかという気はします。神山町も最終的には、吉野川があってすごく綺麗な自然と水があって、というところから始まったのだらうと思うので。

○黒木委員：やはり帰ってくるという子供たちが、どういう感性を小さいときから養ってきたかというのはすごく大きいと思います。体験もです。ふるさとである宮崎の「すき」を「すてき」にするということなんですが、やはりその地域ですばらしい体験とか美しいものとか感動とか、たくさん与えて1回都会に出ます。比べてみてやはり宮崎の方がいいということになれば帰ってくるだらうと思います。そこで都会に負けてしまうとジ・エンド。ですから、子供たちが小さいときから、我々はもっと意識して育てていくべきだと。

例えば農林業というのは、特に厳しいのですが、農業や林業のすばらしさを教えることが足りない。宮崎の良さを教えることが足りない。そんな気がするんです。例えば私の田舎だったら、もう紅葉始まるわけですよ。感動するんですよ、心の感知器がいっぱい振れるんです。心の感知器をいっぱい振らせると、中に感性として残る。そういう意識というか、良さ

を子供たちに植え付けていくことは、将来、20年先に絶対私は必要だと思います。子供が帰ろうか帰らないかと考えるときの、大きな左右の要因の1つになってくると思います。

○新原部会長：ありがとうございました。PTA関係の視点から何かありませんか。

○河野委員：個人的なことになりますが、私も2人子供がおりまして、上が高校生の娘で、下に中学2年生の男の子がいるのですが、上の女の子は、海外で仕事をして1人で生きていきたいという夢を持っています。ですので、もう宮崎には帰らないと言い切っているんですね。それはそれで、親としても仕方がないと受け入れているのですが、下の子に関しては、修学旅行がコロナの影響で宮崎だけになって、その時に青島でサーフィン体験をしたと。サーフィン体験をしたときに、サーフボードの形が「なんでこれで波に乗れるんだろう」ということで、そのサーフボードの先端にすごく興味を持ちまして、サーフボードを作りたいと言いだしたんですね。作るにはどうしたらいいだろうということでしたが、私も知識がなかったので、学校の先生に聞いてごらんと言ったら、工学部とかそういうところに行かないといけないという話になって、「じゃあ僕宮崎大学の工学部に行く」と。サーフィン職人になるという夢ができてきているので、やはり修学旅行とか日々の小さいところからの体験で宮崎の良さを知っていく機会も大事なのかなと、日々感じたところでした。以上です。

○新原部会長：ありがとうございました。体験ということでしたけれども、佐多委員、スポーツ関係からのご意見はありますか。

○佐多委員：スポーツ関係で言いますと、それとちょっと外れるんですけども、先ほど鮫島委員がおっしゃったように、アンケートのところでもどうしても大まかなところしかないので、例えば「子供の充実した教育環境」はどのような環境を求めているのかとか、「希望する業種・業務内容の企業の存在」は、どのような業種や業務内容を希望しているのかという部分がなかなかこのアンケートの中で見えてこないもので、その辺に何か解決の道があるのではないかとはいえます。ですから、もうちょっとこう、ネガティブではなくポジティブにどうすればいいというような部分でのアンケートがあると、それに対していろいろな意見が言えるのではないかとというのが1つあります。

それから、もう1つはこの表で、令和27年の5,074人という出生数がありますけれども、1.68の合計特殊出生率があって、これは割合でこうなっていくんでしようけれども、例えば宮崎県はどのくらいを目標にしたいんだと、この1.68を、できたら1.8、1.9にしたいとか、数も5,074人じゃなくて6,000人ぐらいにしたいというように、ある程度の目標があると、それに向けて我々が努力できるような、サジェスションができるのではないかなと思うので、なかなか難しいとは思いますが、何か目標値、何人であれば宮崎の人口はいいのかなとか、そこら辺の部分が具体的に出てくると、それに向けていろいろな意見が出せる

のではないかと思います。

スポーツに関しては、今、宮崎県にはスポーツ産業と呼ばれるもの、J3のテゲバがプロの集団であるんですが、その他はないんです。おそらく全国でも、プロスポーツ関係の集団が非常に少ない県だと思います。それに関して、選手もそうですが関係するスタッフ、それからサポーター、いろいろなことを考えると、やはりスポーツ産業をもっと活性化して、いろいろな形で宮崎県にスポーツ産業を作っていく必要があります。施設に関しましては、2027年の国民スポーツ大会に向けてすばらしい施設が3つ、それから、シーガイアの後にトレーニングセンターもできることになっておりますので、またそれを利用するために、スポーツ産業・スポーツ集団をもっと活性化させる必要があるので、それに付随していろいろな人が宮崎県に流入してくるのではないかと考えています。以上です。

○新原部会長：ありがとうございました。他にご意見はありませんか。

○甲斐専門委員：私は子供の貧困問題で活動しているんですけども、その中で親御さんや子供さんのことでいろいろお話を聞くことがあって、この3ページの公共交通網の整備とか給与の水準とか、よく聞くのでちょっとお話しさせていただきたいんですけども、収入・所得がこの地域は低いので、県外に出ると言われる方が多いんですね。県外に出て、1回帰ってこようとするんですけども、帰ってきたときに、同じ水準を求めてしまうとやはり仕事がない、から始まって。また、都会だと車を維持しなくていいんですけども、こちらは車がないと動けないので、すごく不便だということで、また都会に出て行かれるという方が結構いらっしゃるということです。都会の方と基準を一緒にするものかどうかと思うんですけども、やはり一度出てしまうとそういった不便さを感じてしまう方が多いなと思った次第です。

あと、高等教育機関の方で、子供のうちから部活動もすごく盛んなんですけども、その部活動にかかる費用というところで、もうすでに格差が出てしまっていて、子供への教育は一律であるべきだとか言われるんですけども、なかなかそこが難しいというところです。それがそのまま、子供時代に体験したことが大人の方にも結びついて、そこから、なかなかこの地域に魅力を感じない、できなかつたという思いが強くて、という子供たちもいらっしゃるというところで、もう少し何か考えていけたらいいなと今回思った次第です。

○中村副部会長：高等教育機関のあり方ということで、大学等の役割とあるんですけども、実は大学に入る前の小学校から高校の間で、どのような、例えば地域に愛着を持つような、取組を見せていくかとか、あとはお互いの価値観の違いを認め合えるような、そういう人材を作っていくかということがすごく大きく、大学での取組を成功させるためには、それまで子供たちにどのような情操教育をしていくかということが実はすごく大事なのかなと思っていて、でないとせっかく大学で人材を育てても、それがまた県外に流出してしまっ

はもったいないし、またそれが戻ってきてくれるような宮崎の良さを、ちゃんと伝えられるような取組もとても大事なのかなというのを1つ考えております。

あともう1つは、「女性に選ばれる宮崎」ということで、自分自身Uターンをして宮崎に戻ってきているんですけども、出て行った時にはやりたい仕事がなくてよそに仕事を求めて、帰りたいなと思ったタイミングでたまたま自分がやりたい仕事があったということで本当に偶然に帰って来れたんですけども、やはり帰るとなった時に、どういった仕事ができるのかというところが男性・女性に限らずすごく大事なのかなと思っています。

今仕事でお付き合いをしている方たちで、結構クリエイター系の方たちに、県外で第一線の経験を積んでいる人たちが実はたくさん宮崎に戻ってきていらっしゃるんですけども、この先、多分いろいろな職業選択の幅が広がってくると思うので、若い人たちが一体どういう仕事をやりたいのかなというのも、アンケートの中でそういったリサーチをかけていただければ、何かしら20年後、今考えられないような職業というのがもしかしたら出てくるのかなと考えていたところです。

○新原部会長：ありがとうございます。2つの論点で言い足りないところはありますか。

○ウォーカー専門委員：先ほど中村委員からありましたけれども、やはり子供の頃からの体験はすごく大事だと思います。僕も全く同じような考え方で、子供の時から大学に入るまでの間どれだけ教育機関として宮崎の良さを伝えるかというのが大きな問題になると思います。

例えば、修学旅行なんかは県外がかなり多いのではないかと、最近は海外とか。それは別に悪いことではないと思いますけれども、逆に宮崎で修学旅行をするという手もあると思いますね。先日、大学の方で、日本の地域文化という科目がありますけれども、その中で学生を綾町に連れて行きました。綾町に行ったことはあるけれども、綾町には何もないという先入観があった上で行っているわけですね。しかし視点を変えたら、綾町はものすごくいいところだというのがわかったと。そういうことが大学に入ってからわかったことなんでしょうけれども、子供のころからそういう教育をしていければ、宮崎の良さ、魅力が十分に身にしみるのではないかなと思います。

あと、宮崎の人口というか人口構成といいますか、どんどん変わってきているわけですから、外国人の方もたくさん入ってきているわけですし、20年前の宮崎とは違うものもあります。そういった、例えば宮崎が変わっていく、グローバル化していく環境にどう取り組むかという大きな問題もあると思います。それも逆に宮崎の良さの1つとして展開させることができるのであれば、そこにもまた魅力も生まれてくるし、それを生かして、例えば、海外との連携だとか、そういったことも生かせれば宮崎もどんどん変わっていくということも考えられると思います。

今思いついたことを言っていますけれども、一番言いたいことは、やはり子供のころから

の宮崎についての学びを充実化させるということが非常に大事だと思っているということです。以上です。

○新原部会長：ありがとうございました。将来本県で活躍する人材を育成するということで、人づくりということをお話しております。宮崎大学でそういった取組をされているのではないかと思いますので、一言お願いします。

○鮫島委員：ありがとうございます。これについて話すと、ものすごくたくさん大きなポイントがあると思うんですけども、これは私の1人の考えかもしれませんが、大学に入るまでは、高校の教育委員会も含めて非常に多くの詰め込み教育的な、サバイバルテストみたいなものを受けて皆さんいろんな大学に入っていかれる。また、現状でもそういうものが色濃く残っているんだろうなと思います。ところが、大学に入って、様々な学部の中で最初の1年はリベラルアーツ的なところをして皆さんの教養を高めましょう、と。これがそこから後は、なるべく卒業した後に生かせる能力をどうやってつけるかというのは、皆さん専門教育の中で学んでいくという感じになっています。結局、大学の中で、すごくアルゴリズムが今までの詰め込み教育から、最初の1年ぐらい少し緩んで、そこから後、どういうふうに、自分で考えて自分で問題解決能力を作っていく、ということをずっとやっていくという形なんですね。

そこで育っていった人たちが宮崎に残るかという、その仕事をした後はジェネラリストとして何でもできる、そして企業に入って、或いは様々なところに入って、どれでも対応できるというような形で今はやっているというのが、どこの地方大学も同じだと思うんですが、そういう概念でやっています。ですから、宮崎大学の学生が宮崎に残るために非常にスペシファイな、ここに注力してやっていきましょうというのをやって、それで卒業した人がそこにマッチしてうまくいけるかという、マッチできる場所も非常に少ない。そのあと、さらに勉強したいというときに、リカレントとかリスキリングという形で勉強して、というところはまだ十分には回っていない。回り始めてはいるんですけども、そういうところが現状だと思います。現状のことになって、果たす役割はどうかというようなところまでは少し難しいんですが、そういうのを考えていって、行き着く先に大きな問題が2つあって、1つは、宮崎に残らないのは先ほどからたくさんお話が出てますが、詰め込み教育の中に宮崎の良さを教育していない。数学・理科・物理・科学・国語・文法というようなところしかなくて、大学に入ってから、いくらそこを教育しようとしても、何となく表面的、スーパーフィシャルで、深いところにズドンと響かないのが多いというところで、そこまでの、若い、或いは幼児期からの教育をもう1回見直さないと、なかなか難しいのかなと。

もう1つは、出て行くときの価値観が随分違います。結局、お金だけでという人もいますし、自分の余暇がうまくいけばという人もいますし、卒に入りたくない、いわ

ゆるクリエイターとかいろいろなことで、フリーターも含めて様々で、生きていくためのちよっとしたお金があればそれでいい、結婚も子育ても何も考えていません。でもそれでいいんですというような価値観の人もいます。そういうダイバーシティの多い人たちをどのように育てて宮崎の地に定着させていくかというのは、ものすごく難しい問題だろうなと思っています。

○新原部会長：ありがとうございます。本県で活躍する人材を育成するために、ということですが、課題やこうすればよいというようなことをお感じでしたら、米良委員、お願いいたします。

○米良委員：「長期ビジョンの策定に向けた主な論点」と書いてありますが、どんな未来を求めているのかわかりません。出て行く、帰ってくる、出て行かないように、といろいろありますけれども、その条件を整える必要があるんですか。今、皆さん方がおっしゃったような条件を整える必要があるんでしょうか。帰ってくるために、出ていかないために。部会長、いかがでしょうか。

○新原部会長：まず、宮崎県を盛り上げるためには教育をしていって、その人個人個人が幸せになるということが一番、教育では大きいかなと思います。

○米良委員：ということは、価値観が違うということですね。ということは、時代の流れにどう即応していくかということですね。それに対して、我々人間に答えがあるんでしょうか。学校の教育は6・3・3。ここをどのようにするかという、今、基本的な困惑をきているのが文科省です。文科省に答えはありません。あるならば、とうの昔に出てきています。これだけいろいろ教育でトラブっているという中ですから、このテーマの中でもうちょっと仕分けを、例えば帰ってくるのならば、生活はどうですかと。ということになってくると、仕事はどうか、給料はどうか、住まいはどうか、交通関係はどうか、そして、帰ったときのコミュニケーションはどうなのかというような生活という枠組みと、それに向かって今度はそれが整い始めると人間は欲が出てきますので、文化、特に情報はどうか、音楽はどうですかという、いろいろな場を求めるようになるし、場に期待し、場を作りたいし、参加したいしという、いろいろな形が出てくる。これも一人一人の個人の乱れというか、格差があるように私は思います。

ですから、最後に、やっぱり宮崎面白いよねというようなことを醸し出すということが、ある意味においては、女性の方にとっては必要ではないか。自分が育てた子供が、極論、裸足じゃ困る。やはりこうでないと、というふうにならざる生活における条件が出てくる。それを宮崎で整えられますか。

この統計の中で、2割の方がどんな条件があっても帰って来ないと言っているんです。学

校で習いました。腐ったリンゴは1個あれば100個腐る。そんな中で2割です。この2割の方を我々はどう受けとめていいのかわかりません。2割もあって困惑する。本音としては、ここで会議する価値があるのかなと思うところがあります。10人中2人ですよ。どう説得しても宮崎には帰らないと言っているわけです。条件をそろえる。月100万出しましょう、家作りましょう、庭もつけましょう、ブランコもつけましょうと言っても帰って来ないと言っている。5人に1人。

全く話変えます。今私がPFIの仕事で、プールを作ります。そのところにある放送会社さんと、大学のキャンパスを作ろうとしております。これが完成するまで5年です。Society 5.0 Zoneと言っています。ところがこのゾーンは多分、5年後にはなくなるでしょう。Wi-Fiも無料になると僕は思っています。ということになってくるとその向こう側はその我々が作る、町といえば大仰ですけども、その地域はカーボンニュートラルにして、ガソリン車は禁止、電気自動車のみ入ってください、もしくはテックか自転車、というゾーンを私たちの企業が今、発表してお願いをしたら、聞いたときにすごく違和感があるんじゃないかと思っているんですよ。ところが、これがCOP26みたいに、女性がああいうふうに批評批判をされている状況もありますけれども、3年後には今の我々が考えている車乗り入れ禁止という極端なゾーンを宮崎の中で作ってもいいのではないかと思っているところもあります。そして、学生さんが来やすく、今はJRだって歩いて7分ぐらいかかりますけれども、それを、あそこにJRとめてよ、と今から陳情します。いろいろな形でこういうふうに、小さなところでまず実験実証をしてみようかと。ですから、ここにおける「長期ビジョンの策定に向けた主な論点」というのは、生活なのか、環境なのか。また、我々の心はどこにそれを位置して持っていったらいいのかという事柄が、はっきりとこの中に出ない。

ちょっと長くなりますけど、鮫島先生は鹿児島出身で、鶴丸高校出身で鶴丸高校首席です。その当時、鹿児島では鶴丸高校の首席は、鹿児島大学医学部以外に受けられなかったんです。他にどんな能力がある大学に行きたいと思っても本人の意思は通じない。鹿児島県はこれを全部したわけです。宮崎でそんな横暴なことを言ったら、皆様方はお怒りになるんでしょうけれども、それが鹿児島なんですよ。県外に行っている連中もいます。その面々に対して、自分が卒業した小学校に帰れと言っています。これが鹿児島の伝統文化です。だから郷土愛なんですよ。それを不自由と思わないんですよ。宮崎にその伝統文化をどう作るか。1500年、どんなに短くても600年かかります。ですから、この中にどんなことを凝縮して話さなくちゃならないのかという指針を、人づくりですから、出すべきではないんでしょうか。宮崎の文化、歴史です。

○総合政策部長：今日の主旨としては、行政としては人が減っていくというところが非常に大きな課題意識があるということで、その中でも皆さんが、今後、長い目で見るときどのようなことを考えていけばいいのだろうかということそれぞれの立場でお考えになってい

ることを伺えればいかなところか今日の主旨でした。

これを見てください。黄色い文字で書いてあります。「未来を築く新しい「ゆたかさ」への挑戦」とあります。これは、今の長期ビジョンの基本目標です。今後どういう社会に変わっていくのだろうかということも含めてこれからまたご説明をし、それぞれについてまたご意見いただきながら、どのような未来を築いていくのかという議論にさせていただければと思っております。

○**新原部会長**：ありがとうございました。これからも会議は続くかと思しますので、よろしく願いいたします。それでは進行を事務局へお返しいたします。

○**事務局**：皆様本当に長時間ありがとうございました。簡単に最後、連絡事項だけお伝えいたします。次回専門部会については、来年の1月下旬ぐらいを予定しておりますので、また日時等を決定しましたら改めてご連絡させていただきます。机上に配布している現行計画の冊子等については、重いようでしたら置いて帰っていただいて構いませんので、よろしくお願い致します。

それでは以上をもちまして、宮崎県総合計画審議会、第1回人づくり部会を閉会いたします。本日は誠にありがとうございました。